

燕石
十種
慶長
江戸圖考
六輯
貳

イロ
679
55



燕石十種第六輯卷二

慶長年間江戸圖考



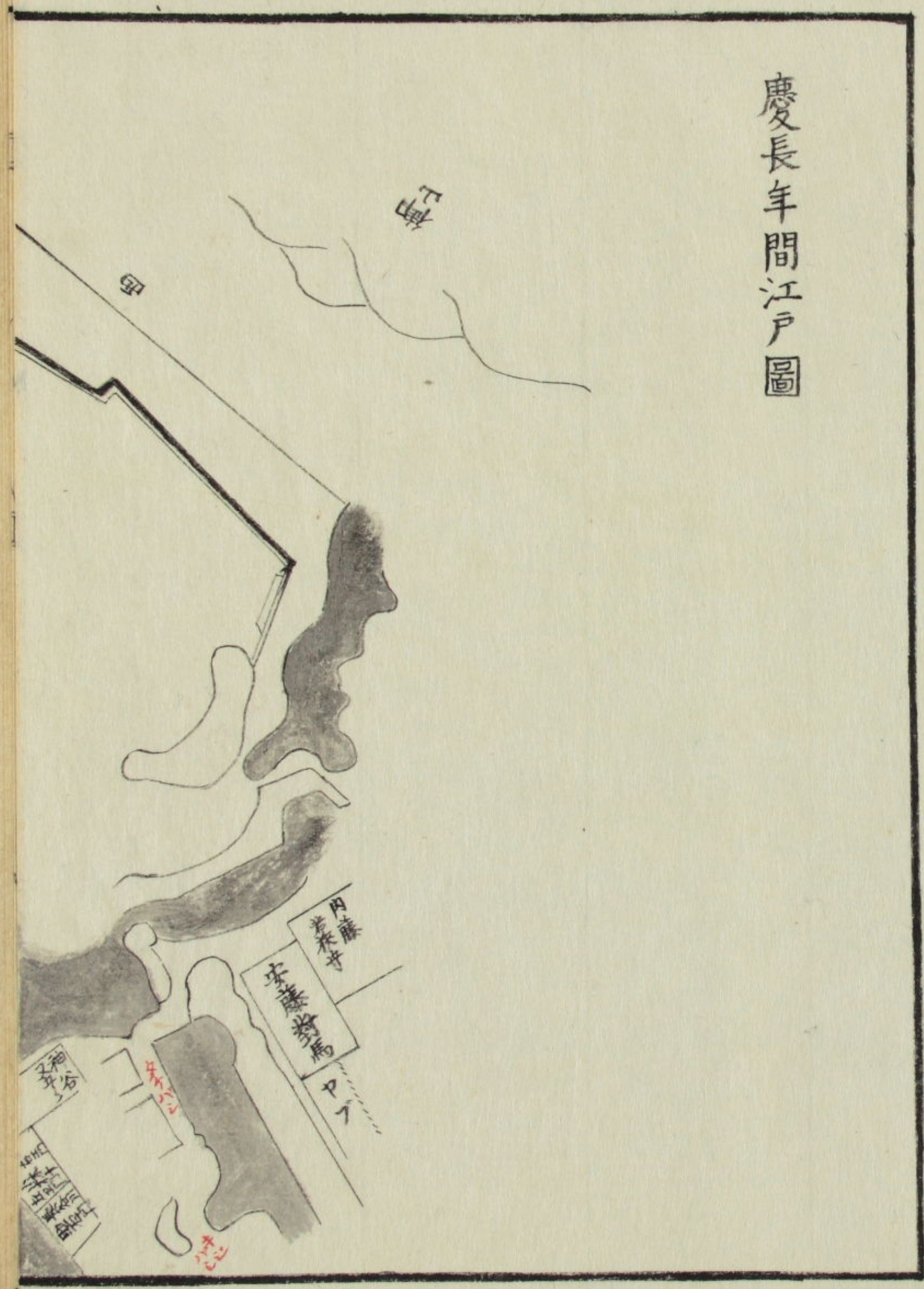
世に傳りある江戸圖を長祿長亨よりまをりの非く志るも
 とも彼二本もあつた得難き事多かりしは昔鎌倉管領
 乃北條氏北と云城邑の画圖ありて今の世に遺る人も武藏北
 うちめと八王寺忠品附書抄の他を自あはれ何ぞ江戸の二本
 傳りて他邑を一本も遺さざるは疑ふるに梅籠園を今
 亦云彼長祿乃江戸画景を見家千速村と石濱村乃間會下
 寺と云あり會下といふ寺號のわかれは疑ふるに二あり願
 好事者北條介限帳をとり取り取らせし後、作さるりの状と心
 此をとも据とて然るをいふは姑く温故の一助とす。又近は元和
 江戸画圖出つと云ふらんいふその果否をあらはれ古印本を寛永
 一張のともまこと多くハ寫本よりて當初の刻本の稀あり元和寛永

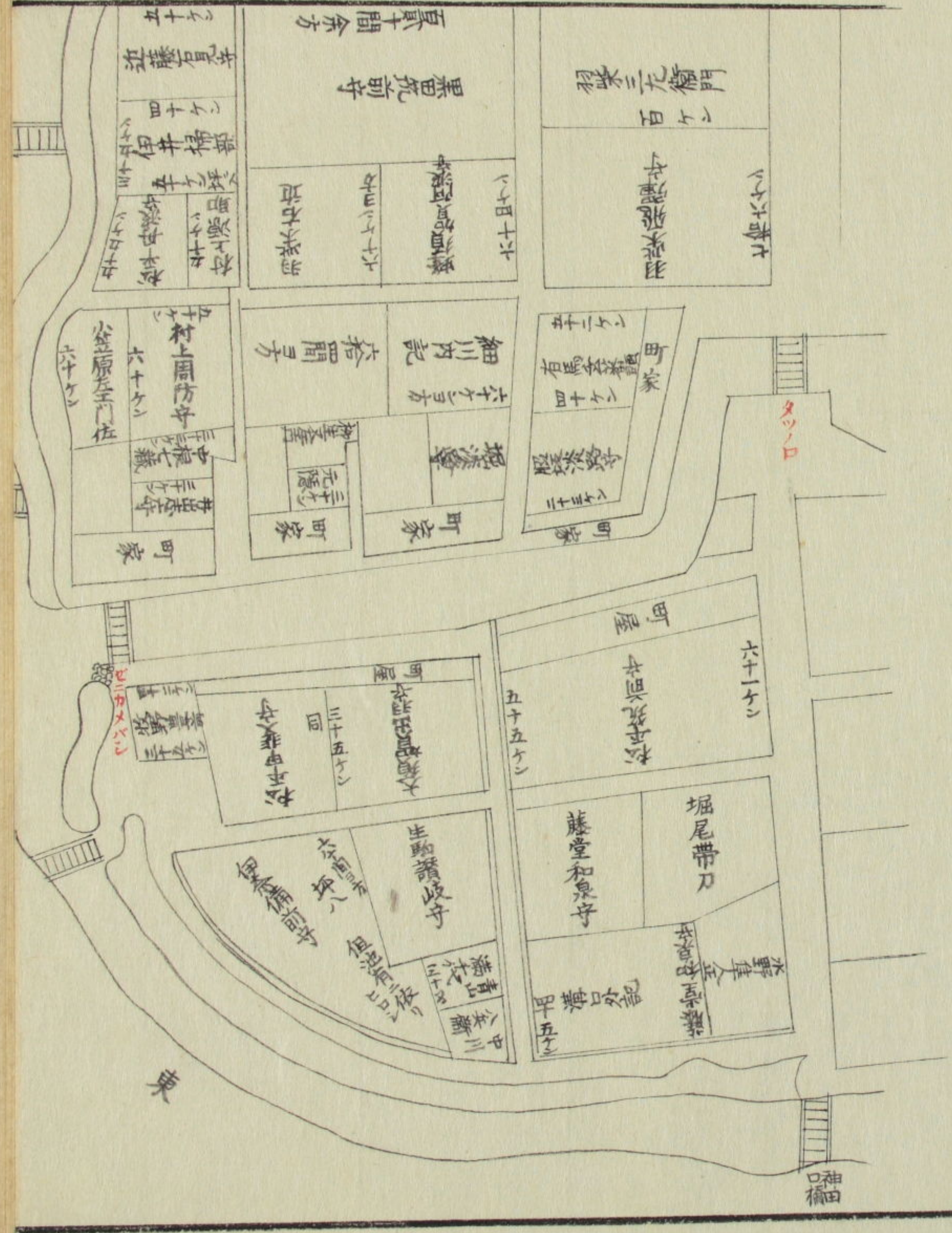
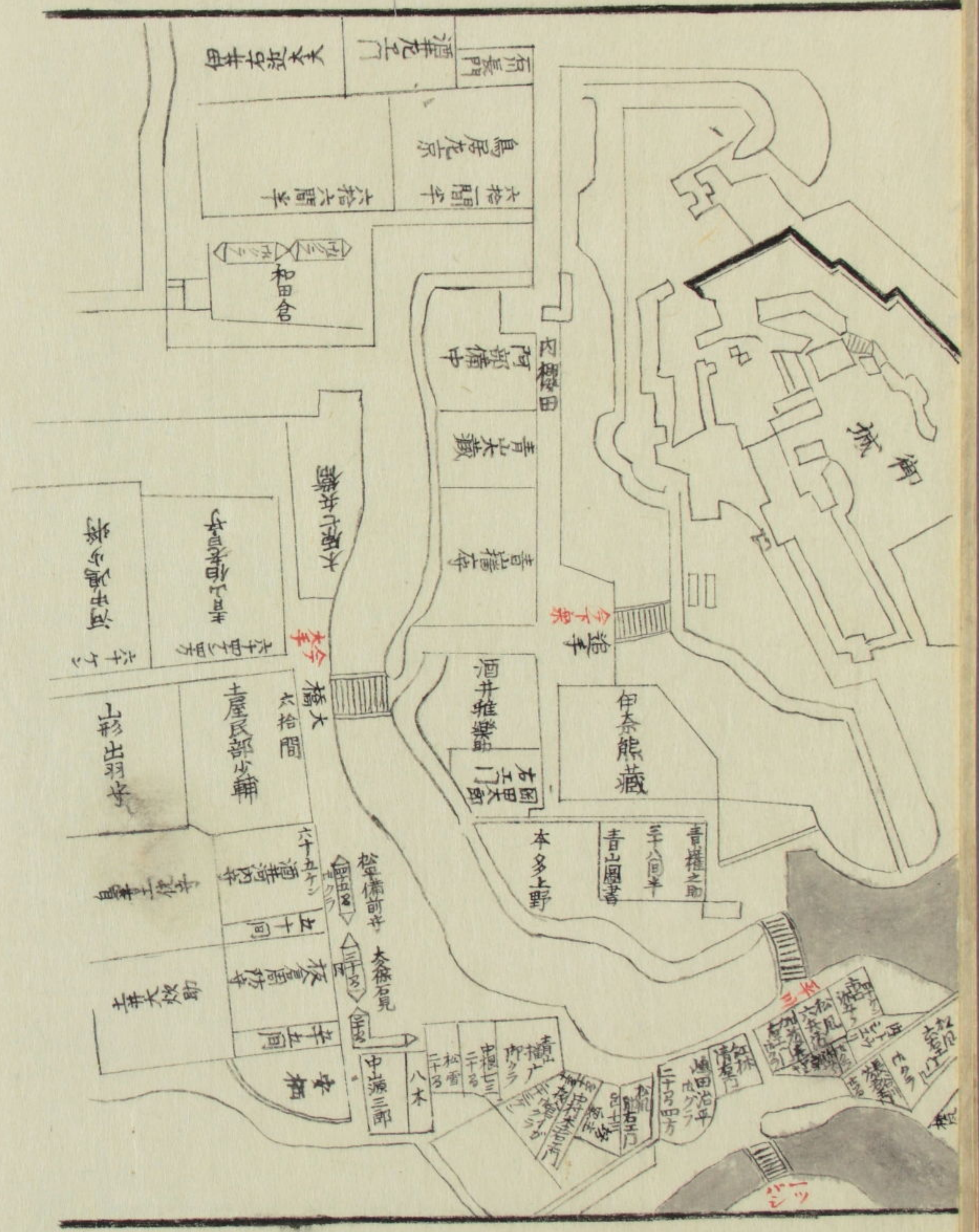
有りあつたものを見ようとすると思ひつゝある人乃蔵の慶長中
 此江戸繪圖あり且曩は梅龍園主人巨細を致證して件の地圖を慶長
 十四年の物とすとの辨論竟は一卷を脱して編圖は卷乃端の
 載し命て慶長江戸圖考といふ余幸々閱を致して以得る圖説の
 精細あるを志すなり九圖中在とある今乃什が二三かごと過ぐれば
 街坊のこまき事就中もつゝも町名を唱ふるのみなく伊橋乃
 名も識ざる多うを是を寛永中の江戸圖と比校れば更なる竹筒古とい
 る一且その考證をるとして北條分限帳開闢略記慶長記見聞
 集これ他得ざる此の舊記多うり此の書り一せよ出る大江戸此古
 圖といふ物もあつて下巻に畫きありといふ

右抄録玄同放言中而載卷首

活東子

慶長年間江戸圖





さす事まゝの巻の叙任の方をりて推をまゝとせんまゝも大家より
其家世々唱へありし名を記を事もりれい必しもまゝとせりし
日も十二年の成しといはん大なるたふさるゝ又成説は西の西南
の方よりせん元武成のりしりの今々其を成張りしらんといは説
もうまゝひうゝその方見聞集云はまの長十九江戸より外へ出ると又
方の口あり南の品川口西を田安口是より外をいひ北の神田口是より外を東を
浅草口又舟口といふあり舟は北條五代記にも西を南の志波口東の
浅草口といひ志波口といふ別品川口是は控れをいひ品川といひりり
あは此圖は徳とんは成し其及いさふをいふ乃成る不ひひの
御城の左なる徳家の屋敷の廣狭あををせりとせりあり押を長
とく免品川といひ南の方の今の芝のよりあはる大名旗本の邸宅
多くまゝなり品川といふては町家續きと見え東海道の大路をま
ひひも延の延ひ成しとせり東南の海辺あり西北は松田あり

麹町の方へ續きり麹町の邊をも古くは心のとせり又初も載りあり
江戸より西を田安の系といひ田安口よりゆれい今の番丁にりり旗本の士
を敷杯もかゝいゝあるらん共多くいふ野と見え北の方神田は
此外もと承りてその神田の柳系の方へ越りてりりまは續き今の段河基
より本郷へも承りては中へあり見聞集は江戸の邊神田の原より板橋まで
見渡り竹本といふも承りて系統も承りあり按て是より承りては其の邊
あり其の邊を延ひりれい系統も承りては竹本も承り限る今も承りては是は
遠く方と見えせんたる成し其の邊を承りては承りあり是は
外田邊延きり神田の
見て推し初め東を浅草口といふ今の常盤橋あり大橋といひ
是より浅草口より一町も續きり昔より街道あり小橋家より天正の
出で宿波の文章ありそを文を傳馬一足可仕候但彼出家に可渡者也仍
如件壬午九月九日直皇宗遠の九條門あり江戸浅草葛西新宿但是白井
近是して江戸より浅州の宿波の海道あり事見えり舟口といひ品川舟乃延

入るはとゞき意あらん其而い定らるゝと今之強靱橋の船入乃不をいひ
ひ舟町といひしも爰あらん又圖書云舟町といふは載る今の道三の橋あり
四日市のる四日市はむかしあはれ橋唯をいひ是は舟入の橋あり是は往來の橋
あり文祿四年夏の翌年ハ冬長は橋の許に強靱を堀出を永樂京後
系後ハ強靱の事お上りて四日市の者其ハ強靱を町の西代官根ハ後
少くとも用ひし
とあり田舎を物見へりいまま町をいひし地をいひし板倉四所及彦坂小刑部及
指しありまゝりハ橋ハ強靱橋と名付りしをいひ板橋ともいひ朽とて
其流堀川と流今の道三の岸の今ハ駿波橋掛り昔ハ板橋ハ絶て久くハぬゆゑ
名ハ流流れて物吹へれと古き云の葉どおひし出りしをいひ北条五代記
町浦の志波のり舞舞を立置毎月晦日勸進能とて法人見物と
云流もいしも同く舞舞ありしと是ハ冬長又年冥ヶ系ハ役終りて
後流旗中の面ハ江戸は法として世もおさまりしころハ流事も免されて
法人の力をあをさめられしものありんらん其冬長十二年二月十日

御中丸と丸九のる今ハ紅葉下のをいひて觀世今喜をいひたりしと經を
られて勸進能を始て自水を同甘田園といひ女來りて秋舞妓をさし
能ハ海をせし事もいひしと法人をあをいひの士風を和けしといひ左は
江戸乃せぬをいひしと一板も冬長八年癸卯の後武家町を板
定りて十二年のハ江戸園を修りて官府におられし則ハ是ありし其
載りし神田ハ橋淺草ハ橋あり是ハまゝと唱へし也 御中丸の系
よりも冬長一板一其餘今の長板橋板治橋といひのりしありし其
餘見のせと只橋のを記して名附し其をいひし也出馬を町のを定りて
まゝの唱へしをいひしハ江戸園と載りしもむあり又今ハ板橋乃名を
これとせし也 公乃りのまゝとていひしからん又強靱橋おほ
しハ橋をいひしは舟の舟といひし其名をのせし又西北乃るハ板
橋ありしハ一ツ橋ありし見聞集云園ありハ舟入のハ後唐乃乃帝
より日本ハ勸進能より教百人の唐人江戸へ來りし
按冬長十二年五月朝舞園
の三使ハ舟來りし信使呂祐吉

先母を廣き屋敷の内より一と家作りをまじけておくれ一其経
是を屋敷小定のり敷 今の道三の岸の殿定小倉の辺松平筑前守と云ふ載りのは
次は後野丸京太夫幸長も父彈正長政外様田原ケ兵衛といふ武藏守
このても名多き土地を先母を祀りしはそを土屋とて父彈正
致仕乃地と定 是を見ても標田の方にて祀り一人の早く殊に多かりと見ると云里田を標
田原ケ兵衛の御田を大石山崎の辺にても殊に加賀の若春院お甲の御田にことと外より
少後守幸長十三年は星の御田に坪敷杯 又外は屋敷を併て祀りし

安國殿伊系忠といふりのよ慶長七年後野彈正長政よりして
りし時屋夜宇守の宅を旅館とて 伊系忠屋夜宇守を南豊人寺の板の家を作
當日の旅宅へ 安國殿見まひの遠路の不居りり別して備足是ふ
とすは後々休息とて侍入とて帰 城のあそびは是は堀の内八十年とも
標田へ戻りししと云徳信を其の城を 是は長年の大石山崎の辺に
後京ありしころも山崎よりとて 是をりて引あせし地形もなる
出来しと 是は堀の町屋の御田 堀は標田乃河ありの地形のさすもなるなりとも

をとりしは難きせり又 御新塚の西の外様の山堀も捷くて御十
三 成屋敷御旗の人々をいよりして山堀の土をりき交かして引互地形
用いしと今如く山堀乃幅廣うり底も殊の外深く堀とあり其は
堀田をて屋敷を祀りし人々を加賀清正 肥後をり 大黒田長政 筑前 福嶋
勝茂 佐藤 毛利中絶云輝 鴻津義久 佐藤 伊達政宗 陸奥 上杉景勝 中絶 南部
信時 越前 伊東長實 丹波 亀井茲矩 武藏 金森祐仙 石原 胤胤 大綱 水谷
佐藤 土方雄久 堀内 等々 是れ載り大名の皆標田のりし 堀田正信 天正十八年より 幸長
八年迄を僅十一年のるありと云ふ 伊系忠 伊系忠は 堀田 堀田の御田を祀りしは下落徳集去天正十八年八月 伊系忠は
柳系武敏大輝 堀田 堀田の御田を祀りしは 堀田 堀田の御田を祀りしは 其外青心屋 堀田 堀田の御田を祀りしは
老いし堀田 伊系忠 堀田 堀田の御田を祀りしは 堀田 堀田の御田を祀りしは 其外是近山願地 堀田 堀田の御田を祀りしは
一山堀直を成たる地方役人 堀田 堀田の御田を祀りしは 堀田 堀田の御田を祀りしは 可成由玄作 堀田 堀田の御田を祀りしは
世も中載り如く今これ大なる内外なるなりと内標田の辺に居りしと見ゆ

る皆地方役人由代官此た多し是の 押入の後々江戸より
その後まゝに居宅を定まりし左殿へ一長又年比後を次申外橋田
及び大名小路の河よりして駕ひあらんさき其のあり大名小路の辺
此町家多くありと見聞集云 當君武州豊嶋郡江戸
内入ありして此の町家集也

此町と云ふ大名小路の邊よりして一長又年比此今の町へ移らん
たり双葉木へ一は島も道三河岸八重洲河岸の邊より移らん
町より由江の既寛永年中の江戸島も見えたりと云ふ所は
町まの川を次八重洲河岸の辺此町を移らん道三河岸此町を
を後より一は一は此町より一は古世より一は事也文明の
此記を江戸城内靜勝軒の記に城門の市場をまゝけ流此
名物はふもあつたりし由をいふまゝなりお續き一町へ一は橋集云
押入國の記をいふは町北の基がく一は町北の町もあく平川に

山間の外は平川町とて町北よりまゝなり今の麹町北へ續き甲別
海道といひてまゝなり是より一は此の如き町を移らん
とも 押入のつゆ中町へは地ある一町の事をいふとありはま
八重洲河岸の辺も町家ありしと見聞集云と云ふ所は
川天神の事よりいふは廣くも及ばざるなり

是をいふと地形廣くは是のみなりて豊嶋乃洲勝云
是今の常盤橋吳服橋等外中町と稱す所を云ふ
町をいふと傳よりて是又長八町の年月が六拾餘は乃人夫を是を神田
の川

今の駿河臺乃山並に押入の柳原の辺近きを是を神田といふ又駿河臺
より押茶久くを昔を神田乃臺と云りか郷造といふなり
世平吉祥寺此旧記又云ふ乃此れ文書めと見ゆ
南乃海を

本云例湯の東南のる芝より此入海をいふなり

四ノ三指金所埋を陸地とあり

三指所埋の流道を埋むるを本云の神田といふは船程乃地あり一幸也一也

其より本家を建ぬ

其長日記云十四年正月四日戸本町又町後又戸本至善改を焚も焚
失せしと云く是亦も世に於て流産の産を焼ひし事見之し

^{町の}城外家墳き廣大ある事を南の品川を田安のそと山神田乃と云

神田のを掘出せし後此遺跡原と改めし期を待てし一昔を以て大
塚ありしと訓もあり見聞集云其長二年乃此町の行人戸本あり
云後神田の系大塚のものとせし六月十二日火定せんと觸て町を巡り
街々定日も掘りぬれん老若男女大塚ありしより難を幸うは是を
本んとす後群集し一廣大に始ると不世をことかありりり塚本を

田して水人ありしを今此新を積之火を附焼きたるなり行人火中へ

飛入るを弟子の行人を例しりつしおらるるもいし我事いふ見

せりり次の日朋友とち連立大塚ありしをいふ人氣を獨り

もろく流ぬり骨交りの灰斗り跡りありと云く

東を流ぬり町墳きある

是なりと云りし一側道の町を積きたるなり

又云戸所の跡を大名町と云り

是内田内よえと云りし一町を今神田といふは大名山と云りし

城といふなり

今此戸町を

始りしもいふ今の町あり

拾貳年改元迄也

其長拾九年より十六年八年をいふ也

大海原ありし頃 當君の沖威勢めて南海をうの陸地とありし町を之
繪

按ふ載ふ所のとく、い今の中町被河河の地也も八年の後出馬一やう
見白くと是いまより古くよりし町とて大變革ありし八年の事と
ふき書もまた長八年の二月に被せりし江戸へも石を人宛の役の者
りる町は國の名書方町場を之を普請せしとて其初よりよりしと
云い見聞集よりい江戸 中井入以來町繁昌一家居多く出またりこれ其
皆事と死して焼込りて長六年福月二日己の刻被河河岸に商家より
火を出し 此の岸の商家い 江戸町一宮も焼込りし由は元作の
町中草子死に火事惣に音あつたに次は皆板ふたふたをた由は編
まらへ町へ悉く板蓋月と焼込りし由は次を信と云者被人々秀て信
とて海道表棟よりすか尾りてふさう一板とてめられたり信
人少信一とて中町或丁目の地は次を信の家は中井入とて普より相も

年
見
風
集

跡としや弁持とていふと異名をす尾次を信といふ是江戸
町尾子とて始ありとて又い江戸町刻を十二年以前の事ありと是も
八年の事とて長日記に十六年六月二日新用の記町刻の事とてしと
後及尾三郎光次と命とていふ京師堺津の商人を信より尾次とい
ふ事いといふ又後の事也とて亦も多ぶとてし
其頃高きふを南武の尾次といふ高武百お又百おの價とて

十九年乃事あり

町の事とていへ皆人尾次を多く築上り家次新とて信り連を首の板
板を尋りて細板を立直つたに皆さうりてそを平其のもあし然るる地
分地を争ひ人といひいおりて進き隣も心遠く隔りぬと

遠望形隨筆といふ

江戸町人の角屋忠を持しものそ 沖田見をゆらさう
権現様の 沖田町ふ角屋忠を立ち事人のいやら事友を親操し

御目見を許さし見回又角を費用も取り成らぬと申さる也有り
 江戸城の事例と云の按ら小とより而の如き今をりて推す事
 八年の二月の迄南海を穿ちて一唯九年来りてくる事一て何を
 うの事一十年少の銘一うりしをいふ所の川し海一名及び江蘇の
 土産物を掲ひし也又二年もわたり一海一さる十三年来る迄も
 有りしと世もわたり一海一左ふは島をりし一故のりなりて是を
 全死か命一外橋田の遠北回りのとも地理をりて考るも終りの地を
 若りともおのつう別一海一物め命一是も是れ二枚ありし物の今
 片一はのこ残りし一故一受るものとす事一海一

概と十三年の後武家町家とも一亦小町一とあり見聞集と云江戸
 御城の西より石垣あり多し一御殿(南向)と云給う文字古本並ふ
 亦のりもとら櫓角倉看りしこれ殿守の雲井ぬえを松風を
 おのつうと美歳を祀りしとあり

是ら因入道に薩々長祿の頃より免を祓建し江戸の城めて其後と杉
 北条の持城と成り時乃當城のさぬい世以とるより少りしをり人慶長
 日記云十一年二月江戸御城九番請中徳次名十又人名一伊賀加茂丸
 馬助松平と依り加茂肥後と羽葉左馬大吏思田筑前と浪野但馬も
 羽葉右近大吏有馬玄蕃頭細川内記松平左馬督兼極若狭も京極
 丹波も福徳信濃も寺澤志麻呂も又二月と由小右江戸着何事も二人
 在江戸人数の石運送のため伊豆國より石積船双と三十艘キマシあり一艘一
 百人持石武入往還も江戸東石の去年まかあり買取たり金を替も
 ちも今と殊の外は重なり頃江戸めて百人持の石をの銀或指取と云
 たる石を評し金小判とある便之國東流を去年 上徳徳奉る也
 申免但し居せしう危ニなり人吏也又云同年石垣六月の末
 四年九月玉造業八月佐廿二日 御幸城 内經營初と云て 將軍家
 御移説あり圖書云十二年四月朔日江戸出請中徳八列安房信濃

城後矣列石垣百石めて勤む但八指石より石を寺を造り石りて
天守乃石垣を築て百石石の弁を掘番信是成勤心石垣を築
二月より扶持多し又云去年江戸石垣を八間也二石を切石あり又
切石あり二石築しけり云々切石を造る指間あり天守惣七居も或間
より合八間の石垣あり天守基を或指間あり云々

徳大寺を廣くも居形造り株を並べ町を築を並べ家居ゆらうは煙之民の
竈ハ懸ひちり

以頭徳大寺の家居形を改りて其美麗の極ハ後の世までもたがひ
あしそを詳くある事ハ下の載也

見渡せし旧跡の浅州よりらんおん

丙辰紀行云々寺ありそを親せきす一毎をそて人の多く系信を
中りそは人士の目人の誘つれて余もまうりらるおん人のいづれ
男女の群集する事亦此清水よりも多く見へる井井物信云

西田む路路よさうらむ本深き水の見へるを音よ吹へし浅草寺
之寄有るよまの松杉梢を高くて花をみ樹を幸ふありし路の廣き
田つらして末の左敷に續きつる初めの牛馬の居ありまき陸奥のあま
あのみて通へるもまた大河流して末の海は居ありと云く是れ和
寛永のころさぬなり

湯嶋の天神

見聞集云見しむむう湯嶋天神乃由社乃果と社壇を澤のり
むも社改るむとて塵のゆらり神を威を失ひ祭禮紀實の時を
志を権実霊社も泥をよ朽ゆる斗とて和光同塵乃縁縁も解りま
斗之「うたぬ神をまゝ多」といふは「捨ぬ金をちりれ浮世
交りて」と專順が言たるも思ひ出さるる 當君江戸へお入るひし
より以来民豊ふ祭昌異ていれが今湯嶋社社へ祈をうす性信とこと
きりもやん社壇乃臺を掃ひいづみんごま如きの敬見之より霊

驗ありしはあきまきといひ習ふし末詣ありて取分毎月の
俵目其の石一夜数ありて十八時中を末詣群集をあらと現堂二世乃
願望を成就し再禮の袖つらありて海道より去見元氏去後より向の
くい道を多むて之をりといひ淡州觀世寺と湯治天神のとい
むしより日向あり建り隨を多く後移り

神田の明神

唐穂集云神田明神は今此酒井澄波の屋敷の石南末より此社地
中入圃の時の地内を大木も生茂の其中より建り年毎に九月祭禮の
節ハ件此は豆のうちの穢をまらくを近所より桑柿をとり先
種を此賣物持を末詣もり白くして種ひり由山本曾り相習て後
より唐穂集ては遠く山曲橋月より則明神の社も今此社地に移
されてそ跡を石井大炊改屋敷より多り今此神田系社の長は彼
屋敷の表門の石の神輿をを御り屋敷の多り地元の所あり

乃り中折り此屋敷より石井家の屋敷を載て寛永九年此園より
用い社傳より今の地に移されり元和二年の事と唐穂集
より石井と觀音寺の按を家家の記より長十二年二月の戸
御奉丸と西丸の石あり觀世寺主今春を主今今の幼進能を令とら
し昨日中橋原草橋芝れの辻四谷れ神田明神門前の又ヶ石れを
れを出りて是ををりて思ふは世に今今の波に甚る遠く後れ
し付り事なり古より今の神田明神といふを則波河卷の事なり
元和二年の事ありて今此地より

貝塚の山王権現

淡羽氏貫書より長十二年山王の宮を貝塚村に移されりといふ是
知事あり移りて長十二年の次 御城内外は昔清路り
しはうり移されりありん

横田の愛宕

見聞集云十年以前の事と云は櫻田の地を寛政の頃より一と風俗を
是の希代の不忠漢の如く見れんと云ふの言を以て見れば其の如く
唯敬申帛と云ふを之と云ふ其後草の飯屋を修め内幣を納め寛政
を守護せしむ今見れば庄嚴殊勝なりと云ふと云く是を又長
十九年より不あり十年乃歸則九年の事と
いふも一りたすまぬと云ふ諸人益夜とも貴族群集を成さ
まは諸宗寺の古縁の増上寺

今の地を以てあるなり 安國殿内京邑云文祿二年の以三縁の増
上寺を廢て園をり今移の地を寫しあつて又天心年中今の地に移れ
しともいへり 鉄臂園塵埃抄云當寺は昔より遷移近所を長七
年寺地を移せし今昔並建之は就旧地今の教房を橋田ありて
其頃堀安飯も秀家も堀いすは熱門と云ふと據るは其の移る橋
田の大名といふは三縁の寺文歴代系傳云當地の草創の地貝塚の基と

ありて後日比谷田に移り後長之長の始まると移り或る同二年八月ありや
江戸名所記云當寺始末を貝塚の基あり光明寺といふ真宗あり
と云く一區の移るもは舊き事を云ふなり何と云く此見聞集といふ
所を芝の地ありと云ふ

吉祥寺

安政より今の水道橋乃迄なりしにありん當寺用開畧記云吉祥寺ハ
今北和田倉の内より延福の神の社地ありしをよ心を延福と号して
又天心十一年卯 五代元照和尚の地後世繁榮して教房の
衆徒衆禪 道のたよりありしと云ふと替地をこひ神田乃舊より
移る今の水道橋ハ其の表門乃橋ありと云ふ吉祥寺橋といふ

廣徳寺

車蹟合考云當寺を元來北条家の内小田原の城下と云ふしあり天心
十八年氏直父子滅亡の後其位僧江戸より來り今乃昌平橋の内松平

伊豆の上谷の地は此の地なりしを免角しく茅庵の
の僅なる堂一字を建多りこの僧侶を希叟和尚と云清首座といふ
僧希叟は後の事り其地の内ふかの茅庵を結ひ長春院といふ
是唯一字塔院なり有りしあり其の甲州武田家の士は志村又左馬
とい者志村金を助一族ありしう天正十年勝頼滅亡以後

徳川家の勤仕一居りし其子の平野也。し君ふ此所の列に入奉仕
を不彼君アルヒ松平陸奥守政家子へ永樂五男又は抱へられ
随分せし其男色乃沙汰より其意をゆき退き其川町に居
せし後又喜物町に寓居し終りを死にけり又左馬伊達家卒人
乃後寛永の始或年七月十五日未だ其屋よりいへ安住居左菩提
一もあまより其廣徳寺に多福を其所の門内にて此沼地あり
其木の田川お路にたる脊板一枚ごりあさつけて其堂の前迄通路と
したり又左馬寺院なりと尋ねりし事左馬いし寺に入光の事あり

此事を初りし其の何處と云はるは禪宗あり小田原より引多し廣徳寺と
中谷と云ふ是今の長春院の開基清首座ありし其和尚は對面し其
向んとて希叟は永樂三拾六條法首座に同本は法包と布施し其而
座は希叟より和尚いふ其方の何處よりありしといふ時其多し其
其武田家の武士志村又左馬と云者之を代り禪宗より其檀那ありし
云和尚も後の約束をまより其下の懸念ことと云く按は其の實承の
始末の事とあれは此見聞集に記しし其の僧侶の後乃事とされと
其の昔の以去祥寺ありし其の移りし寺なりはかの茅庵なりしと
いふ移りし

彌勒寺

南寺の寺は長十一年庚戌の記さうし昔は馬喰町上寺町在りし天正
十一年中下の地に移りし其記さ乃年より其の田畠よりいへし其
田は其石のゆくは此世に沙汰よりし大伽藍ありし其りし其

東光院

藥王心醫王寺と号をいふ所の某師如來喜日の作江戸名不記云
むうし古田持以買入る道灌はかきを中島のなる江戸の鬼門にまき
利生の守りをあかすといふ 東照宮は 沖城をわたりまきなる
御代も尚つる免ゆる事古く誠へありを所の院より終きく 殿中にて
毎年正月九日大般若を燃焼せしめ 江戸長久の沖杉橋より
その内今の常盤橋乃水の地よりまきなる 江戸城月をまき日を追て
賑ひ業ありより依て寺は徳馬町より移されり寺院よりころを
磨き樹木梢をとりまきなる 明暦四年此回福の後狭州の地より
移せり 按るふ常盤橋の邊より徳馬町より移されり 江戸長久九年
の事ありき

常樂寺

今いふ所の所は有寺なる事を詳ふと江戸谷小常樂院といふ天台宗乃
寺なりと其地を詳ふせし三田の辺に常樂寺橋といふ所なりとて寺は
まきなるといふ事いふに少くは江戸の江戸乃内より今も事を記し

東中願寺

同基の事を詳ふせし江戸神田より在りし明暦の火後其地より移る
其地は今明神の下加賀屋敷といふ所にて門法の井とて名水の井今も有
あり西中願寺も 沖入園の以後寺山門の月より寺院を築いし
明暦三年築地に移さるしこいふ

此外寺町と号し寺院僧坊の東西南北の門をあきむ時々鐘鼓音絶は
見佛圓法袖を法にぬきむを法に法に人跡あるは

按る寛永九年の江戸島正保年中此園を見たり 柳原より馬喰町の邊に
この寺をまきしこれより寺町の名もまき也 明暦の火後より移さる

又云徳侯大夫の屋形作りを見たり唯小山の並ひしころ如く 棟破風光り輝き其月
母龍の雲よりまきしとて海なる巻上げ孔雀鳳凰乃法をまきを双てを舞りし是

ふりさけ見んとすれは天津口うらふ心むりまをゆ〜て其形定りあり
軒の光り門の透りふ虎が毛をゆるい獅子が毛をゆるい風情誠よ生々
働くうと身のものもゆるゆるとつ〜り〜又云江戸大名元北庭形の棟破
風風舞い門のありありの獅子虎麒麟を大々々作り色取たるを
をゆる〜また〜ゆ〜と〜事蹟合考云蒲生氏弾正秀行の屋敷の
則此あり 則此あり 台徳院殿と 伊保とて善友良藤の経営あり表門法家より
高し冠木とあり〜る欄を付て羅漢サ四者あり人形家屋敷はもと彫
悉く金銀をちりちり免門の左右に柱あり合分りて庭上より个庭をせり
む花葉もよも合分りて急りたる也茲人以門の良藤を見てゆる事も忘るるを
日書し門と何れ名せり此書行の屋敷の善友良藤とあり〜り家名を
〜り〜りし〜見の或書云善友良藤とあり〜り家名を
出〜り門を殊り飛弾ち二日ゆふ留とあり回々 伊保の時〜家名
し新ら〜り〜の藤あり〜り門を 伊保門を結構とて〜り〜り

云日書門を則び市門の事成へし又善友良藤日記十九年正月の事云此江戸
大名屋敷の善友良藤結構あり〜り松平氏亦善友良藤へ又門の結構あり上総介
と云々〜り云此善友良藤中鴻少将の屋敷と云々則上総介忠輝君の屋敷と同
記十七年九月二日江戸龍の口上総介良藤夜半焼亡と云々この後建し門の
結構あり〜り世の人称美と〜り〜り

氏為龍といふ書よ久保長九郎徳小右衛門を勧進して鶴声の宮に
屋敷を建てる事よ奇麗莊嚴金銀を急りて人の目を驚かす〜り由以い
〜り是を善友良藤の屋敷の儘あり〜り世の風俗も事見え
〜り〜り載を見聞集と云々初めのころ見聞集
二ハ異あり

家康公いよ善友良藤結構あり〜り以山屋の江戸 伊保の日光も金物持も
由保あり和田金右衛門の方山矢倉の破風の合あり相を
將軍家より云 伊保の事駿府へ吹えい由めて病中食物を由保と云
此後云 伊保様江戸 城〜り〜り其由同心と皆人を知る

金物百の法紙も見やつると云く是を以て藤生丸彈き勇以上総介
忠輝君前々の内布以らうゆれに實宗華英のふいう尋や讀史館
編み當家の風の忠信を心と儉素を尚む事ゆらうと國家の今種弟
のく申れ交り性く三河の風をそ被家の風もあふ心得あふ事
よと是國初れをぬみ編せり

見聞集云々 當君北河威勢とて南海以理の地とあり町をまふと爲ふ
町申ゆらうりあつと云く井と堰と入りて海中のわかく美民是以歎くを
君さう一史一民を憐れむ神田の明神心乃岸のちを東北の町一流くゆその
ふとゆの流を以西南北町之流くはと水以江戸へ並く河あふ又云古より細
流只一筋より是神田山岸の柳系よりゆらう

昔さゆらをと水くしてせひ事能記の見田實水の江戸思ふと此の
水を中河辺の水とせしと見田其始の事又長八年北條後と云く事
は文をそ記す一東海名不記も此池其うみ江戸中北水道の源と云

江戸中といつて程あり梅は此池を古くより有しとの見田或は國狹心の
池を則ち池形といふ程もゆらふ事なり是の附會の事ゆて端をくくと
河く北条分限帳ふ江戸梅田地方武田實文の地を古田新六郎願き
由を載と此新六郎といふ道灌の孫孫六資康ら子なり後武庵と号
ふる也一見新六郎神田山岸の地を願せりこれい地と道灌との向順
とれに神田心の梅柳系すて出てゆりし事知るし北条分限帳ふ江戸
神田新堀澤といふを以てゆら今も柳系と云く乃下上雁ヶ淵の中り古を
唱つる度りの其造より源も出来ぬや又柳系といふ地名も
古き事と見田堀池も昔より柳はみと云り此二をよ水の源と
云ふよりより名も起りぬや

安永十一年の春玄仍は世に連を解は流の思ふ来り青柳のをりゆ流と
と終向をくゆり実なり一流も旧跡流も東代すとも待人舟人此流と

以て吟詠する所也

按ふ只柳系といふ地名よせたる向も河を柳もまろくまろくさる見ゆ
此曆の回祿といふ柳もことごとくをせしめや昔は柳系町とて此町後
有るを實文武事本下の地へ移されしとて其柳は享保の初年此地を
成した柳系といふの柳を植へ置き由 約命ありて後植らるしとて
又云い水 柳城堰の先なるを流して舟町へ流るは舟町を始し舟の
の事なりしとて其の柳系より流るは神田堰より流る道三河岸の川へ
流るしとて水陸未詳

此流は橋入の渡より河を共皆植たりしとて名を橋入と

此五の橋今其の所を詳しせば此河はつちをそりてわたりてを如く
下も其を置きを其いとありし

又上載る下も其ありしとて此河の事しありし 柳系入の後長年中此河の

とて 柳城を始奉り大坂の邸宅町ありてきし初め此川乃う流す

神社佛閣ありしとて江戸外もとて及びてあるを是れ其の世より成りし地及
記録ありしとて考証あり是より外はありしとて田野の地も其の世より
ありしとて其の後の世よりいふ所ありしとて其の世よりありし

慶長年間御曲輪内圖説

今按るに此處慶長十二年十年の頃あり 西九曲築城の収束に改りありん
大の辺の二の倉敷をいへり酒井左衛門大史青心雅樂助或人皆云長十
二年に改名せし此處酒井雅樂助青心大史と記す又伊奈徳茂云長十二年
筑後とに任せしは此處徳茂と記せしと推して知る也又名氏のと著
頭あり或る名を代りて齋齋せしもの新下の姓名の例ふ大略を新して
後考を俟又按るに此處殊々見えず 御本丸今の太の目より東のより常
盤橋山を右門近北の神田橋内より南の盤橋通より今の坂下山門辺までの
弓をなぞり

大の

今の下系橋あり

酒井雅樂助云

右云酒井大史忠世云長十二年七月三日雅樂と改む 云々長十四年七月十四日中奉書に雅樂

左大臣勅定不の思あり

青山播磨守

播磨守忠成長十八年二月卒

青山大藏

権樂助幸成長十二年又尾浦と改む

阿部備中守

河内善九郎正次長五卒父善九郎正勝跡職を給り内書院番改む

右近衛中守任事一由一右近衛の左大臣の左近衛中守あり

伊奈能茂

能茂忠成長十三年筑後守に任事

岡田右衛右衛門

太郎利治長元卒七十六と卒す

本多上野

上野助正純あり

青山圖書

圖書助成重元和元年九月卒す

青山権左助

圖書助成重の養子あり實父大久保石見守小連座へ長十八年上罪

せしむ右五郎の左大臣との九三の九北思ふ

大橋

今北大臣の大橋あり

河内鴻少将

上総介忠輝の慶長八年二月川中鴻少将を以て右后職を給り四月十六日從四位

上権少将に任事し元和二年七月没収せしむるは又按伊達家記に

長元十六年元丸内重信及び山内重信の討上総介殿左大臣の

裏腹入筑前きたるを記す是今の就る石垣植の左大臣を始と

能のしぬ一は思ふて見ると今の性よりあるは通とて其東より
橋あり付る一思ふて長十六年より後ののたわらさる事あり

羽柴元輝也

蒲生秀行也 長十七年八月十四日卒

羽柴三左衛門

松平三左衛門輝政 長十七年八月廿二日御称号を賜り 同十八年四月廿五

日卒

羽柴右近

森右近大夫忠政あり

近後石見

石見右兵衛尉八天 十六年二月十二日卒 平九郎秀用を寛永二年
二月石見右兵衛尉を今長年中の思ふ石見右と書する事 頼朝

井伊掃部

辨之助直孝 長十年四月十六日叙任 掃部助と稱し 十二年小中と掃部助

と改む

村之源助

今子孫絶と

村上園防也

園防と義明 祿九万石 元和四年二月六日家人争端不依て配流と

中根七藏

中根七藏 記録に所見あり 一は代官中根七藏 重吉を賜り 記す 又
中根喜房 正次の退治あり 知るべき

井出志摩也

志麻也 正次 長十四年卒

元隠

五右衛門

武人の傳未詳

松平筑前守

若田筑前守利常長十年八月津守を稱す

大須賀出羽守

出羽守忠政長十二年九月十日卒し子息之希在徳康勝元和二年柳原氏の

嗣と依家廢す

松平甲斐守

甲斐守忠良寛永元年卒今の但馬守中務守彌康徳和の祖也

牧野豊前守

豊前守信成長十年四月廿六日叙任其後因通改と改名す

青山滿千代

傳未考

中川八玄坊

長文長十八年二月八日坊也性勤しく同列國部八十部を討て切腹す

山形出羽守

最上出羽守吉光也長十九年正月廿八日卒す

安栖

田村安栖長有長十八年卒其法印小叙すと云い人丹波の藤原業成相

傳すくく〜因事よをしあるは是より先宅地の稱りとも知るをう〜云

松平備前守山藏

備前守某々店左衛門昌利四男也終ん共い人子孫絶せしめ事實傳り

下の武之所の内流皆内代官所の内流あり或ハ伊予備前守乃銀字ありと

知る〜云

大久保石見守山藏

石見守長安あり長十八年七月九日卒す

彦坂小刑部

小刑初元正慶長十一年代官所百姓之事に依て改易せしむる石見小刑初り
由科所を支配せしむ世に知らるなり

八木松雪。高野市之邊。早う菴。松風助右衛門。松風六右衛門六人の傳未考
市野夾五布

市野製石吏実利の初名歟

円及修理由緒

修理元徳治承長十三年十月廿四日卒を

神谷又五布

此又布の銘は孫又布某又叔由陣旅人を殺害して立返す事異なり高代記
に見くより

小林十九徳門

傳未考

西隅の山

此山今北 西九柳殿及び知事山 柳宮の所を云ふ(一) 四谷西連寺記より

此所 柳築城前の地名をまへて知事山と唱へ由見白 此國考の文政十三年の冬
内命あり古國を相違し

時地誌局に於て集録する知あり藤盛の
暇密に記して参考の補也

江戸古繪圖考附録

貞如考

内及若狭守清次

初弥三郎若狭守長十年若狭守に任じ同十三年十月父修理亮清重卒して
其遺跡を継ぐ後執事職に就く大坂安慶の役 如城に於て 若狭守を
守護し奉る

安慶對馬守重次

重助基能の二男天正年中より好交軍功を顯し後
台直と云はれ奉り安慶又年関ヶ原の役心道の供奉同十二年十月と列
吉井と雖も又千石を賜り大坂の役供奉を

青山圖書助成重

台直公 中母堂寶基院殿内由緒の人あり中苗服部氏青山牛吉史
忠重の嗣と云ふ事此氏を稱し後食禄一石を賜り安慶十九年山崎守を
討ちり三千石を賜り在りて執事居る

本多上野介正純

天正十九年正純十九歳の時より

神君に奉仕し長久手を執

事職に補せし元和二年

神君薨御の後関東より向て再執

事職に補せし元和八年内勅命を蒙り羽州由利に配流せし

伊奈悠藏忠政

佐宗忠次の子也

神君の侍側奉仕し父佐宗も卒後誦没関東出羽

を移り後筑後も改む

酒井雅樂助忠世

河内守重忠の子也天正十八年関東

御入國の特別に五千石の地を賜り

台位に奉仕し長久手関ヶ原戦後上列那須郡一萬石以り同様に列の

内より加増し千石同十四年加増し千石大坂の役供奉後年從四位侍從叙任

青山猪麿忠成

青山大藏幸成

台位に奉仕し長久手小碓井を築地を賜ひ返り加増し同十年四月

十六日大坂の陣に任じし同十八年父忠成卒兄忠成父の遺願を継ぎ忠成

の被倉屋の築地を継ぎ幸成の如く大坂の役六千石勅氣を以て軍功を

顯し勅氣 伊免

阿部備中忠次

始名善九郎初名

神君に奉仕し弘治二年

内軍始より大小の戦に供奉を

蒙り長久手父伊豫守に勝り遺跡を賜り後内書院番より大坂の役

に供奉を

島居左京亮忠政

長久手父の遺跡を賜り左京亮に任じし同七年奥羽岩城を給り大坂

の役 若君の守護より城守

石川長門守康通

長久手関ヶ原の役尾列法洲の城をもち翌年二月英濃大垣城を賜り同

二年 韃靼父日向也家成は先達を卒と

酒井九遠尉家次

始小幡又宮内右輔と号す孝文長又辛酉ヶ京の役後陣の固めを勤む同九年上列之麻村を禰り大坂あり 陣先を勤め元和二年秋後を角移す

井伊右近左直勝

井伊を初か痛直政の嫡男なり孝文長七年父の遺跡を禰り同九年名命を奉り江列長根の城を築く同十九年大坂役も病者なる中か掃初直直孝をり陣代多し同辛酉 命ふ依て江列の石版を直孝に禰りて之を安中右衛門と改て其初か痛

柳原遠江守康勝

孝文長十年父の遺跡を継大坂あり 陣先供奉再礼す天王寺表に於て戦功を顕す同又月亦病臥三十六歳して卒す

● 本系七名傳

青山伯耆守忠俊

初少より奉仕一関東 涉入國の後中書院組改孝文長十年台徳公 市上信の侍供奉孝文長の末中書院番改同十八年二月孝文父播磨忠俊を送願一萬二千石を禰り忠俊が初直直の采地合并大坂か痛幸成り石原の月も也禰り

川中嶋少將敏

上総介忠輝主孝文長八年二月信列川中嶋城及び采地十二石を禰り同十年従四位少將叙任同十二年秋後國を不替大坂の軍終りて翌年勢別朝徳に禰り

土屋民部少輔忠直

天正十年甲別没後の時六歳少く死を遁れ同十七年 神若山守野の侍駿河守法見寺に於て 石版を以て所茶局養子と爲り同十九年初て采地を禰り

関ヶ原に供奉する長十七年卒嫡子平兵衛知成にして父の家紋目を継ぐ
板倉周防も重宗

父ハ伊賀も勝重と号も重宗ハ 台徳公に仕奉り忠性胆昔公十八細中寄
以政少を兼て大坂の役も供奉を後年従正佐少將に任ぜり

酒井河内守重忠

始興四節天心年中より奉仕し屢軍功を勵し其長又幸関ヶ原
亂羽重幸上別所橋本を駕り大坂の亂少ハ江戸より再亂に供奉

安栖

初北條家より仕へ彼家亡て天心十九年より 神君に仕奉りし田村安栖

土井大炊政利勝

初見三郎と云幼年中より 台徳公に仕奉り其長七年中総小見川にて
番地を給り同十八年中総佐倉の城主と云後老中も補せり

山形出羽も義光

天心十九年九戸進討より 神君奥列信丈助大出陣 出陣を展らるは時

義光 神祖の侍陣營よりあり侍廻り二男四節二節を十景石具よりして

内家人こそ大名の子内家人より列せし始之居彼河も家親より伏見 出陣の

初も義光志を通り関ヶ原亂にも己の五郎より上杉と戦ひ其長十九年

義光卒して家親家以継ぐ又曰宿願成り居城あるを時乃人山形出羽も

と記せりりのあり

水野隼人心忠清

始權十郎秀之長七年より 台徳公に奉仕し中書院番頭と成大坂の功より

依て三列所を殿を駕り若幸ハ 台徳公に奉仕し関ヶ原役山原の供奉

後元和大坂の功よりして甲別所高郡を駕り忠長卿より附る

堀常刀右衛門

元尾列の人信長秀吉に仕奉り其長又幸関ヶ原役中味方となり軍忠を勵せ
爰より於て出雲隠原の両面を駕り同十七年六月卒を

松平筑前守利常

中苗前田中細言利長の嫡子長六郎元服此時中称号を賜り從四位
侍從兼筑前守と任じ同年九月 台位公卿君を利常と配せしむ
五之侍

阿茶局の子神尾五之侍

羽柴飛騨守秀行

中苗蒲生氏文祿四年父卒して家を継ぎ羽柴氏と稱す父氏郷の時
秀吉母して 神君の内塔と云ふ父長十七年九月十四日卒を息男忠子代
家を継后下野守忠郷と稱す

羽柴三左衛門輝政

始秀吉の父豊臣氏を賜羽柴氏と稱す文祿三年
神君の姫君を賜り室を圓ヶ原の役内味方と稱す父長十七年とありて
伊家号を賜り参議と任じ

後堂和泉守高虎

元江別の人父源助之虎と云高虎父長圓ヶ原とあり
神君の属し奉り忠功を顕しを依て伊勢安濃津の城を給り後年從四位
少將と任じし寛永七年と卒す

溝口外記

一万余石の人あり大坂の役は供奉し再礼の時好むを切腹と云ふ者ありしを
改易せしむ

昭信信濃守安治

始名基内秀吉は信長と長又年圓ヶ原役内味方とありて軍忠を励まし
元和元年致仕して寛永三年卒す

有馬玄蕃改豊氏

秀頼公の奉仕人 神君を失ひ奉りんとて大坂伏見の間以の介發勅を于け
豊氏父有馬法中とあり 神君を守護し奉り圓ヶ原役も父子忠を

その功を以て後継地を加へ給りて長七十年

神君の由養女相平孫七郎を豊臣氏に配せし後年従四位下侍従に叙任を

● 中川八重

弟より

青心備千代

善心忠書即隊重子かたむね実子めり別名 台直とて仕奉り後北十郎に改め

大坂の役軍功あり

生駒續波も一心

如秀幸の仕奉り長五年関ヶ原の役中隊方にて忠功を勵み軍卒に後其功を

賞せしれ續列を賜ふ元和六年六月廿五年を

大須賀出羽忠政

神原式部大浦康政の嫡子之外祖大須賀五郎九郎康之の養子とて天正十七年

七月家を焼く関ヶ原役少少の難宮城に止り長六年遠列横須賀の城を賜り后

出羽忠政を以て同十二年九月十日卒を以て子國九三才りと家を焼く

堀淡路も直重

監物直政の二男 台直とて奉侍一信列順坂に於て一力石を賜ふ大坂の役

中陣の先を勤む

細川内記忠利

崇長五年中陣の役父城中と忠興兄と一帯忠隆一同東國より小川

中陣の先を勤むとて方陣記より忠貞忠隆の先を勤む海道を奪ふ

内記忠利の旗本に止り関ヶ原の役も忠貞忠隆の先を勤む敵を破る

忠利ハ 君の中陣に在りて功を顯しむ時功の功に依り豊前小倉若井豊後杵築

等の四領とも三指を賜ふを賜ふを願ふ忠隆父の幼氣を以て依り忠利を

嫡子とて崇長十年侍従に任じ大坂の役も忠貞

を命に依り國より忠利供奉を元和五年忠貞致仕三齋忠利家督寛永

九年十月四日肥後熊平を賜ふ五指四力あり

峰須賀河波と至鎮

孝文長入奉父河波と家政入道とて蓬庵とを至鎮家を継河波とて及大坂
初冬の軍功を顯し元和元年正月 内家号を賜ふ

黒田筑前も長政

神祖伏見 山内城を初父勲解由入道孝高と共る是の忠功を顯しし
関ヶ原の役も父子たは味方とて軍功を勵とて長て父入道筑前守を
賜ふ孝長九年孝高卒て後長政家を継て筑前も長政を室に

神君の御養女實ハ保科彈正忠直の女也

伊奈備前も忠次 始熊藏

神君も奉仕 関東 山内國の時武列小玉侍樂に於て孝高の子石を賜ふ
右徳初も長政の孫とて関八坂祖禰の事を當り孝長十八年六月卒を

松平甲斐も忠良

神君の御弟松平因幡も康元の子あり孝長八年父の家を継て大坂の役も

供奉とて

元強

柳生又九郎宗經

但馬も宗嚴の子あり孝長五年上杉征伐 神君也 山内向の時
野別山に於て孝高の軍記ありとて孝高の時宗經も浪人めて國人を
領し上り孝高の兵を配るべき旨 命あり関ヶ原の軍終て知れを賜り
内家の人列を父宗嚴の法の遺者宗經も其業の達を

牧野備前も信成

内通政事は頭を豊前もとて 関東 山内國の時武列石戸を
賜り孝長関ヶ原の役供奉后大出番の政を勤む

井出志麻呂も心次

駿河の人父の友九郎心次とて 神君も奉仕 祖禰の事を當り孝長
十一年を叙爵して志麻呂も心次也

● 中村七藏

村上岡路と義明

始丹波も長秀と岡秀とありは、長秀は長六郎岡ヶ原に上り、京勝を治く
大坂再礼の上総介殿の属し、上りの名を以て、運來せしむる名に收

● 村上源助

名考あり

井伊掃部直孝

長十郎別親、台座より奉仕同十二年、中書院番改后、大書院番改大坂役
見立被り、御直勝陣代と成り、供奉再礼の御尚軍功あり

● 近友石見も康永

松平丹波も康永

幸苗戸田氏め、御心忠重くあり、始孫お希と稱を後、
神君異父同母姉妹久松佐治もを禰り 松平氏も威文、祿元年丹波も小任

室とも関ヶ原役も供奉

小笠原九郎の依信之

始名、小笠原實、酒井左馬、忠次三男、神君の命より、小笠原掃部介
信頼の養子と成り、関東、
父年、て家督を賜り 関ヶ原の、
神君の命より、小笠原掃部介

○ 内及御理清成

御理、免清成、仁を清成、改養子、實は右近進、義清三男
台座より、御知雅の以より、奉仕、天正十八年、尚麻の地、
奉仕職とあり、長六郎職を免され、後、
十月年を

○ 板倉伊賀も勝重

始名、四郎左衛門

神君も奉仕、
神君の命より、
神君の命より、
神君の命より、

大坂内陣ありて京師に在りて 帝師を守護す

大久保石見守長安 前守のとき進取見守の異同ありし

武田家の扶持人猿樂あり知名十名諸大久保相換り忠隣苗字を替り
神君執事一内家人に列せし登庸して二万石を願ふ諸臣郡代の
司と大坂内陣の山藏を執り金銀を支配せり長十八年四月卒す

羽生本右近大丈忠政

忠政は森三左衛門尉可成り二男に天正十二年三月兄成茂と長可尾別母忌
於て討死の後家を継同十三年侍從位下叙任羽生と稱す秀吉の
後て初く軍忠を勵し同十八年信州川中津四郡十二万石を領す長五年
内味方と成りあるり山崎より又 中絶言様中絶めて山道登り志田の
押へりて石川玄蕃允康長他石城前も秀吉と共に三人各在二万石外二月
六百美地一國を領す十八万六千五百石あり又大坂前後の軍の功あり其後美地
も織田姓の復し森と名乗り寛永三年八月九少将に公同十年古松入軍

めく草を石川玄蕃允康長松本より半石他石城前も秀吉と共に結ぶる石

● 此中ゆり八貞如の考は脱せしあり

○ 此中ゆり八貞如の考は脱せしあり

文久三年癸亥十月下院一枚了

活東子

明治二十二年己丑一月下旬

筆者

妻木頼徳



